

【論文題目】菅原道真研究

～『菅家後集』所載の作品論と編纂事情考(注釈を通して)～

焼山 廣志

【論文要旨】

序 [作品概要]

今回、研究対象とした『菅家後集』の概略として、小島憲之氏の言及を以下に引用する。

「醍醐天皇の代になって五年目、昌泰(しょうたい)、四年(901)正月二十五日、五十七歳の道真は突然罪を問われ、太宰権帥(だざいのごんのそち)に左遷されて都を追われた。上流貴族を流罪にする時は左遷の形をとることになっており、道真は事実上大宰府に流されたのである。『扶桑略記』によれば、道真を重用した宇多上皇はこの知らせを聞いて急ぎ参内し天皇を諫止しようとしたが、警備にはばまれて門内に入ることもできなかったという。運命を一変させたこのできごとから約二年の後、延喜三年(903)二月二十五日、道真は配所での苦しい生活の末に死を迎えるが、その間の詩集は『菅家後集』という名の詩集となって今に伝わっている。『菅家後集』は、その奥書によれば、もと『西府新詩』(「西府」は都から西方にあたる大宰府)と題され、死に臨んだ道真から封印して紀長谷雄に送られたという。」

(日本漢詩人選集『菅原道真』141～142 頁)

と説明されているのが本稿で取り上げる作品群である。

第一部 [作品論]

この『菅家後集』中 太宰府謫居時代に詠作された「五言 自詠」から「謫居春雪」までの作品三十九首の注釈作業を通して、作品の内容から 大きく以下の三期に分類し、菅原道真の詠作姿勢を探る試みをした。

- 「1. 太宰府謫居一期 昌泰四年(901)春～延喜元年(901)秋」
- 「2. 太宰府謫居二期 延喜元年(901)初冬～延喜二年(902)早春」
- 「3. 太宰府謫居三期 延喜二年(902)春～延喜二年(903)冬」

この分類に属する主要作品を具体的に考察し、その作品論を通してその期の菅原道真の詠作姿勢の特色を概観する。

「1. 太宰府謫居一期 昌泰四年(901)春～延喜元年(901)秋」

この昌泰四年は七月十五日に「昌泰」が「延喜」に改元されている。(『日本紀略』醍醐天皇、昌泰四年七月十五日の条に、「改昌泰四年為延喜元年」とある。)この年には「敍意一百韻」を始めとする「詠楽天北窓三友詩」「哭奥州藤使君」等二十韻以上の長編の大作が矢継早に詠作されている。いずれも秋までに詠まれたものだと考えられる。右大臣の地位から突如として職を解かれ、太宰府に左遷させられたその現実を直視出来るだけの精神的余裕を持ち得ず、それをどう受け入れれば良いのかに苦悩する、その痛々しいほどの心の葛藤が作品の根底に流れているものが、この期のものと考えられる。

ここでは「敍意一百韻」「哭奥州藤使君」の長編二大作及び「秋夜」「讀開元詔書」「慰少男女」の三首を取り上げて作品論を展開する。

「2. 太宰府謫居二期 延喜元年(901)初冬～延喜二年(902)早春」

この期の作品としては「東山小雪」から「梅花」あたりのものを想定している。この時期、延喜元年の冬を迎える頃から道真の詩風に変化の兆しが見えて来るように思う。具体的なこの期の道真の詩の傾向として次の二点を指摘することが出来る。「1. 太宰府謫居一期」時に詠まれている作品群に比して道真自身が、精神的に或る種の安定が見られるようになったことが大きいと思われるが、「自然の事物」を「事物」として見つめることが出来るようになり、その「事物」に「自己の感情移入」を図る作品が目立つようになる点が、まず一点目である。そしてその「自己の感情」とは、主に「望京の念」と換言してもよい。

そして二点目は、道真の得意とする「見立て」の技法を駆使する作品が目立つ点である。これは道真の「詩人」としての自負、執念なるものが或る種の精神の安定期を迎え、表出した事象とも言い換えられる。

ここでは「東山小雪」「雪夜思家竹」「梅花」の三首を取り上げ考察をする。

「3. 太宰府謫居三期 延喜二年(902)春～延喜二年(902)冬」

この期の作品としては「奉哭吏部王」から「偶作」を想定している。この期の作品群の特質として次の二点を指摘したい。

その一つは、「仏教への傾倒」である。死期の近い事を悟りつつある道真にとって死後の世界に心の安泰を求めようと、仏教に心の支えを得んとする姿勢がより鮮明になり、仏教用語が詩語として多用されているのがこの期の作品の特徴とうつる。

そして二点目は一点目と深く関わるが、死期の近い事を自覚しつつ、我が日々の謫居生活に何の好転も見出せないことから来る諦念、もしくは意識的にそうしようとする「則天去私」とも言うべき心情に裏打ちされた詠作姿勢が見られる点である。大曾根章介氏の言われる「現世の苦悩を払拭し超俗悟脱の境地に近づこうと真摯な努力をしながらも、遂に果すことの出来ぬ弱い人間の姿が現れている。」や「心情を率直にしかも平明流麗な語句で表現した晩年の詩篇は、至純最高の詩境に到達したものといえよう」と指摘されている事が主にこの期の作品を指しているものと思われる。

ここでは「官舎幽趣」 「偶作」 二作品を取り上げ作品論を展開する。

第二部 [編纂事情考]

菅原道真の太宰府謫居時代に詠作された作品は巻頭の「自詠」から巻尾の「謫居春雪」まで三十九首残されている。それらの作品は今までほぼ制作時順に配列されていると考えられて来た。

今回取り上げて考察を試みた作品以外を含む全作品の注釈をし終えて見えて来たのは、概ね、制作時順に配列の方針を取りつつも、そこに菅原道真の後世に自己の生き様を託そうとする意図の基にこの『菅家後集』が編纂されているのではないかという事である。とりわけ巻尾の「謫居春雪」にそれが顕著であるように思う。

今までこの詩を辞世の句だという伝え方が定説のようにになっている。ところが、太宰府謫居中に詠まれた作品の注釈を施す作業を続けるなかで、この巻尾に置かれている「謫居春雪」は本当は辞世の詩ではないのではないかという疑問が生じて来た。本稿でその疑問に対する筆者の見解を提起し、更には太宰府の地より、盟友紀長谷雄に託した『菅家後集』の編纂事情の一端を考察した。

第三部

初出論文一覧

資料編 〔『菅家後集』【注釈】関連 論文一覧〕